



関わりから生まれる

子供の成長

学校で、地域で、スポーツを通じた子供たちの育成に取り組む方々から、お話を伺いました。

地域と学校がつながることで スポーツの可能性はもっと広がる

1 子供たちをみて、感じること

土屋●今日は地域と学校の連携による「スポーツ」を通じた子供たちの育成の意義というテーマでお話いただきます。よろしくお祈りします。

まず、現場で活動されている皆様は、今の子供たちをどのように捉えていますか？

斉藤●外で遊ぶ子が少ないですね。だから怪我をすることも少ないという状況ですね。

もう一つは簡単な動作ができないこと。跳び箱にまっすぐ手をつけなかったり、鉄棒を握るときにサル手(親指と人差し指をくっつけて棒を握る)になってしまったり…。サル手は滑って落ちやすいので、順手もしくは逆手で鉄棒を握ってほしいのですが…。

土屋●先生たちはこういった状況について、どう対処しているのでしょうか？

斉藤●子供たちの運動能力の低下に問題意識を感じて、色々な運動を取り入れている先生方はいらっしゃいます。しかし、体育が専門でないと、そもそもサル手が危ないということが分からないんです。先生方が適切な指導をできなければ、子供たちはサル手のまま続けてしまいますよね。

土屋●高秀さんが担当する小学校での子供たちの様子はいかがですか？

高秀●普段の運動習慣のあるなしで、子供たちの様子は差があるように思います。バランス感覚や反射神経などは特に。私が関わっている学校は、校舎の建て替えて何年か運動場が無かった時期、100mを全力で走りきれなかったり、体育に苦手意識をもったりする子が多くなりました。苦手意識は根気不足にもつながってしまいがち。でも、体力向上の取組や、

芝生の校庭ができてからの運動量の増加で、ずいぶん変化が見えてきました。

土屋●小学校の先生でも、体育が専門ではない先生が技術的な指導を行うことは厳しいですよね。そうすると、同い年の子から刺激を受けるような場面、例えばお手本になってもらうといった工夫が必要かもしれませんね。

斉藤●そうですね。しかし最近「失敗することは恥ずかしい」という雰囲気が出ています。体育の時間にみんなのお手本になることは、僕らの時代はとてもうらやましいことだったんですが、今の小学生はお手本になりたがらない。むしろ、「見本にさせられちゃって残念だな!」といった声すら聞こえてきます。

高秀●今の子供たちは、シュートを外したり、パスを失敗したりすると、責められる傾向もあるみたいで(笑)。失敗を恐れて勇気が出ないこともあるようです。

土屋●さらに、失敗を恐れさせているのは親からのプレッシャーでしょうね。私も身に覚えが無いわけではないですが(笑)。ミスを許容することも必要ですよ。

紙本●チームに所属した場合も、勝つための役割を据えられ、役割をこなせなければ怒られますからね。そのため子供たちはストレスをためてしまうということもよくあります。

土屋●教室での勉強とは違い、スポーツが子供のストレスになっているとは考えてもみなかったですね。でも子供の立場になって考えてみると、スポーツ活動が新たなストレスを加えているという可能性は大いに考えられますね。

2 スポーツを楽しむことの効果

土屋●このように様々な問題を抱えている子供たちですが、地域スポーツ関係者はこの現状に対して、ど

のような活動をしていますか。

紙本●私たちが行っている地域でのスポーツの活動は、まずスポーツを楽しんでもらうことを考えています。ですから、指導者は技術を教えるというより、失敗を恐れない雰囲気作りに重点を置いています。実際、そういった雰囲気を作り出すことで、子供たちはどんどんチャレンジして成長するし、楽しんでスポーツに取り組むようになります。

土屋●「スポーツを楽しむ」ですか。とても良い表現ですね。高秀さんの行っているタグラグビーはいかがですか？

高秀●激しいイメージのスポーツに対しては、苦手意識が高い子供たちがいるので、「楽しく激しすぎない運動」であることや、チームワークを学べるという観点で取り組んでいただいています。タグラグビーは、遊び感覚の準備運動、鬼ごっこやゲームを通して、楽しみながら、でも、たくさんの運動ができ体力がつく。さらには運動神経の良し悪しに限らず、活躍できる役割が多いんです。

土屋●楽しみながら体力向上するなんて、とても良いことですね。今の子供たちの体力低下に危機感をもっている人は多いけれど、その解決方法が昔ながらの精神論に行きがちなのが、少し気がかりですね。

高秀●体力向上だけのためにスポ根のようなやり方をしてしまうと、子供たちは体育の時間が嫌いになり、逆効果になってしまうことも。詰め込み型の体育は、詰め込み型の勉強と同じで、たとえできたとしても、楽しくないので長続きしないですよ。結果が見えてきて、自主的に練習に取り組んで、それがまた成長につながり楽しくなる。そんな良い循環が体感できると、同時に根気も育っていくのではないのでしょうか。

土屋●こういった「楽しむスポーツ」が徐々に地域が増えてくれば、今よりもっとスポーツに関わる人の裾野が広がると思うのですが、地域スポーツクラブもなかなか運営メンバーが変わらず、閉塞感を感じますよね。

紙本●たしかに「勝つんだ!」、「気合だ!!」というクラブは今も少なくはないですね。

しかし、勝利や体力向上も大事ですが、私としては、やはりスポーツを通してコミュニケーション能力であったり、人と接する力であったり、失敗から

立ち直ったりという、普段の生活では体験できないことを体験できるということ、地域スポーツとして担っていきたくと思っています。こういった良さをアピールしているつもりなのですが、なかなかそういう魅力は伝わりづらいですね。

高秀●まさに、スポーツの良さってその部分にありますよね。スポーツは実際に体を動かしてコミュニケーションを取ることで、体験を通じると、頭だけで考えることとは違う気付きがあり、理解し合える。しかも失敗を度々経験する場所なので、それと同じだけ克服できるチャンスがある。

紙本●そうなんです。それに加え、スポーツを通じて感情の起伏を作ってあげることも大事なんです。最近感情を表に出さない子がとても多い。

高秀●たしかに体を動かすと感情が出てきますからね。友達同士のぶつかり合いも、スポーツをすることで起こりますよね。表面化した問題は、その場ですぐに解決していけることが多いので、とてもいい経験になります。コミュニケーションの取り方など、その後の人生にも応用がきく部分も多いですよ。

紙本●子供たちはスポーツを行うことで、楽しくなるとどんどん気持ちを解放していく。心を解放した状態で、褒めるべきところは褒める、叱るべきところは叱るからこそ、意味があるのだと思います。

土屋●最近は親に気をつかう子も多いですからね。子供にとって親は本当に大切な存在で、全て認めてもらいたいからこそ自分の気持ちを抑えるという子も多いのですが、それがストレスになってしまいうことも。だから親には色々な視点を意識して、我が子を見てあげてほしいけれども、どうしても親子の関係は固定化しやすいですからね。

高秀●そういった固定化した関係を良い意味で壊してくれるのが、地域の存在なんだと思います。子供の良さを、地域の方たちが第三者の様々な視点で見上げて、いいプレーなどを褒めてあげることで、この子、こんなにできるんだ、頑張れるんだと、親が気付くこともあります。

紙本●そうですね。最近の子供たちは、親や先生以外の大人と関わる機会が減っているのが、是非、地域の色々な大人と関わって、褒めてもらって、子供たち自身も自分の色々な良さに気付けるようになると、なお良いですよ。

座談会メンバー



つちや ゆき
土屋 由紀さん

烏山スポーツクラブユニオン
(地域スポーツクラブ)

NPO法人世田谷まなびネットで、学校の授業に地域の人材や外部人材を入れる活動を行う傍ら、一般社団法人東京スポーツリンクでスポーツ関係者のネットワーク作りにも取り組んでいる。



かみもと さとる
紙本 諭さん

NPO法人はちきたSC
(地域スポーツクラブ)

地域の中でスポーツを通じて、人のつながりを作り、人のつながりでまちをよくすることを目標に活動している。サッカー、バスケ、チアダンスを子供向けに、また大人には健康体操や、多様なサークル活動を行っている。



さいとう たく
斉藤 卓さん

体育活動コーディネーター

大田区内の小学校で1年生から6年生の体育の授業に入り、担当の先生とともに指導している。今年は中学校の部活動のコーチをしながら、地域と学校とスポーツをつなげる活動を行っている。



たかひろ あきこ
高秀 章子さん

杉並区 学校・地域コーディネーター

杉並区立高井戸小学校を中心に、教育支援をしている。編集者としてのネットワークを活かしたキャリア教育、タグラグビーを活用したチームワーク作りのプログラムなどに取り組む。一般社団法人「まなびの天才畑」代表。



3 地域のもつスポーツ人材を学校へ

土屋 ●こういった地域のもつ様々な視点を、学校の体育の授業に生かすことはできないでしょうか？

斉藤 ●私が体育の授業に入るときには、常に個を見ることを意識しているんですね。得意な子供たちはさらに上手くなるよう、また苦手な子供たちには目標を低く設定して見てあげる。例えば、たとえボールに触れなくても、人のいないスペースに走れば、ナイスプレーと褒める。そうやってどんどん褒めてあげることで、子供たちに自信をつけてもらって、動くことの楽しさを知ってもらいたいと思っています。

高秀 ●外部の指導者が入り、一人一人に指導していただくことで、子供たちは自分を見てくれる存在を意識し、頑張ってみようと思う子が増えますね。しかもアスリートのプレーを間近で見られるのですから、さらにやる気に火がつく。

土屋 ●やる気になった子供たちは成長が早いですからね。しかもどうしてもクラス全体のことを考えなければならない先生方とは異なった視点で、個に焦点を合わせて指導してくれるので、子供たちにとっては貴重な経験だと思います。

高秀 ●また頑張ろうというモチベーションにつながるんです。以前、外部講師の指導が起爆剤になって、夏休みに練習を頑張り、100m走で9秒も速くなった子がいます。こうやって成長した子が出てくると、周りの子供たちも先生も刺激になり、クラス全体に成果が生まれたという実績もあります。

土屋 ●それは、「頑張ればできる！」という言葉だけでは伝えられなかった実感を、子供たちが体育によって気付いたということですね。同じように先生方も参考になることが多いんですね。

紙本 ●たしかに成功体験はとても重要ですね。今の子供たちが自尊心や自己肯定感が持てない原因は、小さな成功体験を積み重ねていないところにあるのではないかと。というか、大人が子供たちの細かな成功体験を見つけられず、褒めてあげられてないんだと思いますね。

高秀 ●伸びしろのある子供のうちに、成功体験をたくさんしておくことは、彼らのその後の人生の支えにもなるので、積極的にいいところを見つけて褒めてあげようになりたいと思います。

4 スポーツコミュニティづくりを進めていくために

土屋 ●では、今後の地域の役割はどのようなものになるのでしょうか。

斉藤 ●例えば中学生の部活動で取り組んでいるような

規範意識を教える生活指導の側面を地域スポーツクラブが担っていかなければならないのではないかと考えています。

紙本 ●たしかに生活指導という側面を地域スポーツクラブも担わなければいけないと思います。今までの地域クラブの多くは、勝つことを主眼に置いていましたが、最近は生活指導を行うクラブも増えてきているので、今後は部活動と地域クラブの関係も変わってくるのではと感じています。うちも中学校と地域クラブが連携をとって、一人の生徒を様々な立場から見ることを意識しているの、学校の先生方と良い信頼関係を築くことができている。

土屋 ●やはり一人の子を複数の目で見るということが大切ですね。そのためにも若い方たちが地域スポーツに安心して関われる仕組みを作る必要がありますね。兄弟姉妹の少ない今の子供たちにとって、若いお兄さんお姉さんに接するのは貴重ですから。

紙本 ●子供たちに教えることは、若者にとってもいい経験になるんですよ。多世代と一緒に活動するプログラムでは、はじめ全く面倒を見ることができなかった中学生が、我慢を覚えながら、上手に小学生や幼児と一緒に遊んであげられるようになるなど劇的に成長しています。

また、小学校の放課後に校庭で実施しているスクールは、スタッフが小学校講師として働いているので、子供たちはコーチを知っている安心感、私たちは校庭の使用というWin-Winの関係が成立しています。こういった地元ならではのいい関係が広がればいいなと思っています。

斉藤 ●スポーツ選手の引退後のセカンドキャリアと結びつくシステムができれば、人材の有効活用の仕組みとしても、さらに工夫の余地がありそうですね。

土屋 ●そういった工夫を地域が包括的に連携して行えばいいですね。地域では若手もどんどん育てているので、世代交代を図りつつ、みんなで知恵を出し合えば良いものが生まれるはずですよ。東京では地域スポーツクラブとともに、学校を中心とした地域の支援組織も各所で作られています。子供たちの成長のために、スポーツを中心として様々なことを地域で連携して行えるシステムをさらに発展させていく必要がありますね。それでは本日は皆様どうもありがとうございました。